様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6　月　1　日現在

機関番号：32408
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520514
研究課題名（和文）　国際共通言語としての英語のコア･アイデンティティと社会的役割

研究課題名（英文）　Core Identity and Social Function of English as a Lingua Franca
研究代表者:生田　祐子（IKUTA　YUKO）
文教大学・国際学部・教授
研究者番号：50275848

研究成果の概要（和文）：
コソボ共和国における異言語話者間のコミュニケーションと英語使用の関連性に関して、質的調査を行った。非母語話者間の英語には、複数のアイデンティティを共有する Hybrid Identity (Ikuta, 2011)が推察され、国際社会で他者と関わる「自らの追加言語」と考えられる。民族が分断されている地域や、紛争後世代(Post-Yugoslav Generation)間では、コミュニケーション手段の妥協策として英語が選択される場合があり、補助的な中立言語として機能する。

研究成果の概要（英文）：
A qualitative study of English as a lingua franca for inter-ethnic communication was conducted in the Republic of Kosovo. Among the Post-Yugoslav Generation, without knowledge of the language of other ethnic group, they would choose English if they know, however, it is regarded as rather “compromise” as a supplementary neutral language than their positive choice as a common language. However, English is respected as their additional language to gain access to global communities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	800,000	240,000	1040,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学　英語学
キーワード：英語の多様性

１．研究開始当初の背景
　コソボにおける紛争後の世代(Post-Yugoslav Generation)では、言語が異なるアルバニア系コソボ人とセルビア系コソボ人の間でコミュニケーションの手段がなく、英語が共通言語として機能する状況があると予想される。

２．研究の目的
多民族間のコミュニケーションにおける共通言語としての英語の特性を分析し、共通言語としての英語が共有すると仮定しうる普遍的な特性と社会性を考察する。

３．研究の方法

コソボ共和国の調査参加者に対して、次の４項目を中心に、半構造的インタビュー手法により質的調査を実施した。(1)紛争前、紛争後の民族間の対立感情。(2)和解に関する理解の相違。(3)公用語としての共通言語の認識。(4)母語と外国語教育のあり方（英語の役割）。対象は、主に３つの地域(プリスティナ、ミトロビツア、ラホバッツ)とモンテネグロで実施された多民族宥和事業のワークショップの参加者である。事前アンケートとインタビュー(semi-structured)実施後、音声データの文字化を行い、内容をコーディング手法で分析し、結果をもとに考察した。

４．研究成果

地域の政治的な要因により、セルビア系コソボ人（セルビア語話者）のデータが予定より少ないが、主としてミトロビツア南部とプリスティナの大学関係者と学生、NGO 主催の多民族融和プロジェクトに参加している学生、コーディネーターたちから有益なデータを得ることができた。非母語話者間の英語のアイデンティティは、複数のアイデンティティを共有するハイブリッド(Hybrid)アイデン ティティであると推察し、英語の役割は、国際社会へアクセスする手段、情報収集と発信するための自らの言語である意識が高いことが判明した。特に、民族が分断されているミトロビツア地域等において、アルバニア系とセルビア系の紛争後に教育を受けている人たちは、コミュニケーションの手段として英語使用を選択する場合があるが、他の世代は、コミュニケーション手段の妥協策として英語を選択することもある。すなわち、相手の言語が理解できても民族間の力関係のバラ ンスをとるために、中立言語の英語使用を望むこともある。しかしオラホバッツ地域出身者のデータからは、２つの言語が混じり合った方言が存在する地域もあり、両者間のコミュニケーションには特に英語を使用する必要がない場合も判明した。今後の民族宥和のためには互いの言語を学び、積極的に使用する状況が望ましいと調査結果の一部が示唆しているように、リンガフランカとしての英語使用が、必ずしも平和構築には役立つとは考えられない。

現段階では以上のような結果ではあるが、セルビア系コソボ人への調査依頼が予想以上に難航し、また実施した人たちもコソボ内では政治的な拘束があり、回答の信憑性については議論の余地がある。またアルバニア系コソボ人も同様の問題を完全に回避できない。今回の調査のように回答に関して政治的な見解が含まれてしまう可能性が高い場合は、調査対象との信頼関係を構築する時間が事前に必要なため、初対面でインタビューをした人たちのデータに関しては、信憑性に欠くことも考慮しなければならないと思われる。調査対象者を、セルビア系とアルバニア系コソボ人と限ると、現実的には接触する機会が非常に限られるため、紛争後コソボからセルビアへ移住したセルビア人、またマケドニア在住のセルビア人等も調査対象にし、ユーゴスラビア時代とポストユーゴスラビア時代における多民族言語話者間での見解を加えることにより、よりグローバルな視点から言語教育政策の有効性を考えることができるかと思われる。多民族が共存しうる地域においては国家の枠組みを超えて近辺の民族間でのコミュニケーションも重要と考えられるからである。

研究成果は、2012 年度に関連の学会誌に２本の論文投稿を予定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）

①Ikuta.Y.(2012) Implications of Multilingualism and Learning English as a Lingua Franca in a Multi-ethnic Context: A Case from Kosovo

②Ikuta.Y. & Takahashi.R. (2010) What is the Expected Standard of ELF in International Communities?: A Field Study of Proficient ELF Speakers Focusing on Japanese UN Officials, International Association of World Englishes, Simon Fraser University, Vancouver, Canada

③生田祐子(2010) 「リンガフランカとしての英語の役割-コソボ共和国の事例より」日本英語メディア学会（旧：日本時事英語学会）東日本地区研究例会（第７８回）青山学院大学

④Ikuta,Y. (2009) English as a Lingua Franca to Bridge Diversity in Kosovo, Bloomsbury Applied Linguistics Seminar, Institute of Education, University of London

〔図書〕（計１件）

①吉村耕治編（生田祐子他著）(2011)「現在の東西文化交流の行方 III―多文化と多言語の壁を打破する資源説」大阪図書

６．研究組織
(1)研究代表者
生田　祐子（IKUTA YUKO）
文教大学・国際学部・教授
研究者番号：50275848